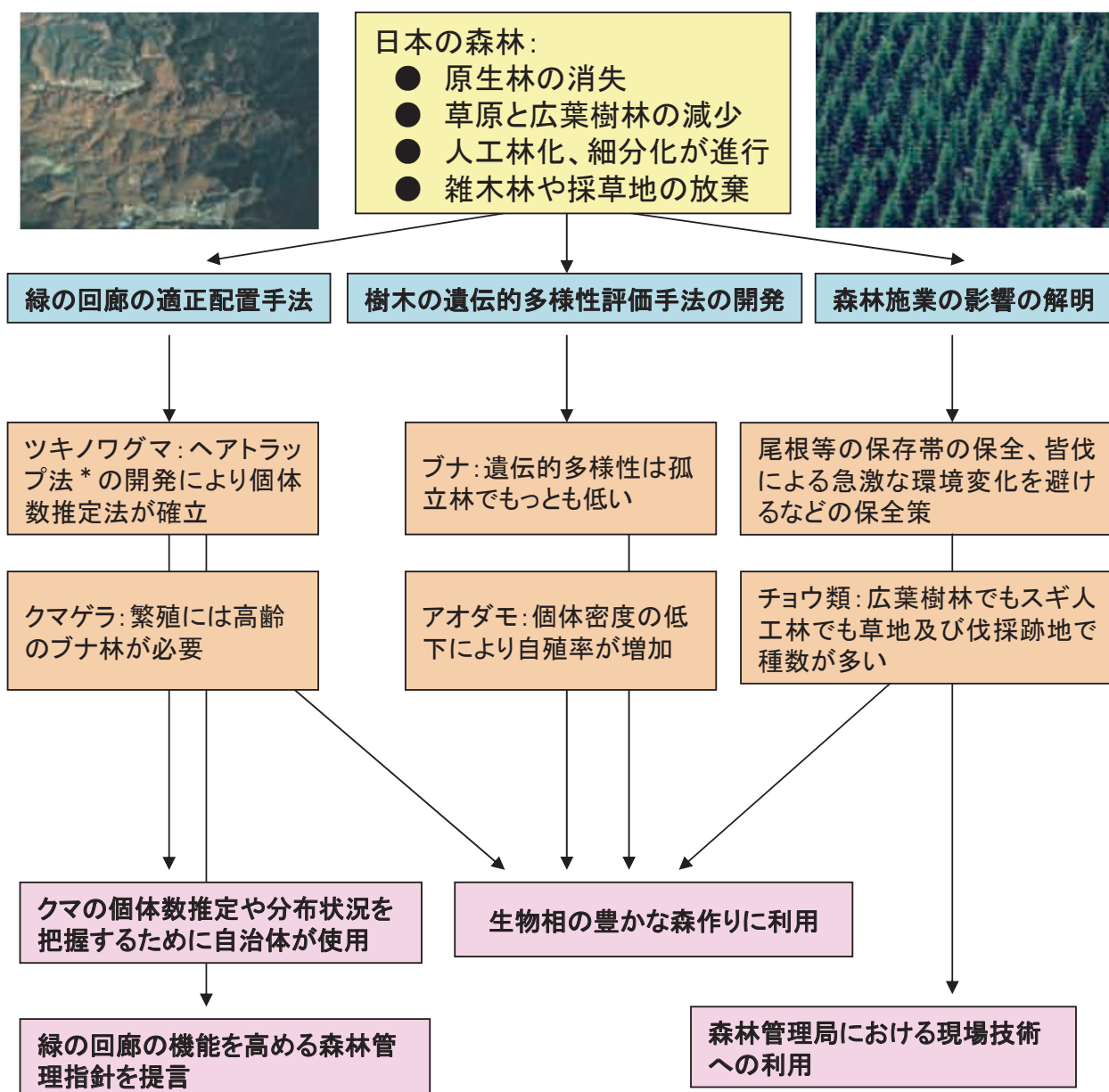


ア分野 森林における生物多様性の保全に関する研究 (イ) 人為が生物多様性へ及ぼす影響の評価と管理手法への応用

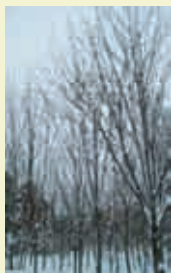
背景と目的

人間は、木材をはじめとする様々な森林資源を利用していますが、そのために森林を大規模に伐採したり、人工林を植林したりして、人為的な改変を行ってきました。近年、森林の利用にあたっては、森林の多面的機能の発揮、持続可能な利用が世界的規模で求められており、さらに生物多様性国家戦略（1995）によって、保全と利用の両立が求められています。

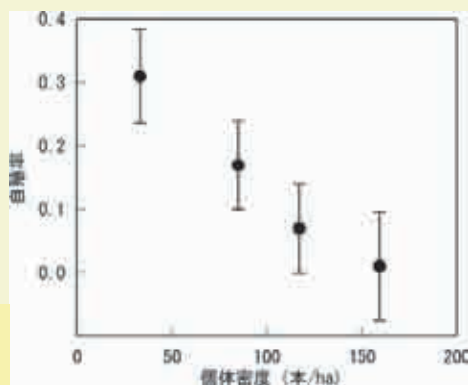
そこで、人為影響を和らげる方策を立てるために、人為的改変によって森林生態系における生物多様性がどのような影響を受けるかを明らかにし、多様性を保全する管理手法の提示をめざしました。



樹木集団の遺伝的多様性の評価手法開発

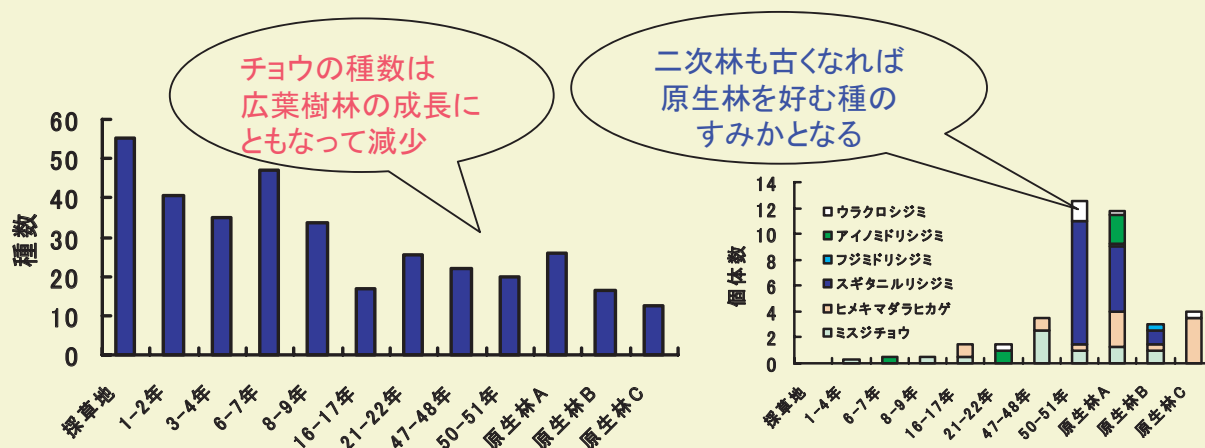


アオダモ: 個体密度の低下により自殖率が増加します。



ブナ: 分布の周辺林分ほど遺伝的多様性は低下し、孤立するとさらに低下します。

落葉広葉樹林の二次遷移にともなうチョウ類群集の変化



人手を加える場所と保護する場所を区別した森林管理によって生物多様性を維持できます。

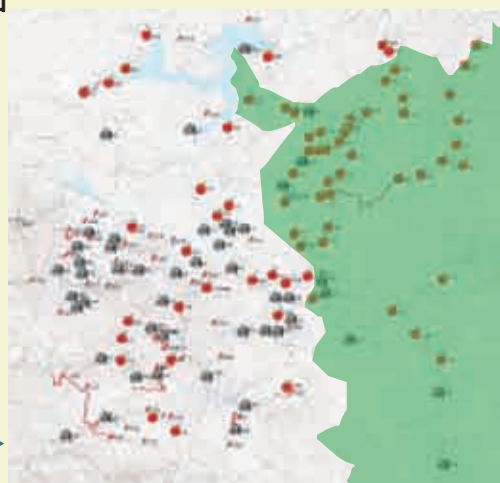
ツキノワグマの個体数推定法を開発→緑の回廊を評価

ヘア(体毛)トラップによるツキノワグマの生息分布調査



▲ヘアトラップに訪れたツキノワグマ

北上高地「緑の回廊」内外での捕獲状況
(回廊内にクマは少ない)



*については、巻末の用語解説をご覧ください。